

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



輪になって語り合うよこび クリスマス会での一場面 (志津川西第一自治会)

特集 新しい故郷をつくる

- 「ともに願い」「ともに寄り添い」「ともに歩む」を合言葉に ③
つばめの杜西区自治会 (宮城県山元町)
- 思い描いたまちの姿を確かめながら ⑤
玉浦西まちづくり住民協議会 (宮城県岩沼市)
- 住民主体の倶楽部活動から、自治会の結成へ ⑦
志津川西第一自治会 (宮城県南三陸町)

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
(東北工業大学 工学部 建築学科 准教授 新井 信幸さん)

まじわる災害公営住宅 ⑨
湊町復興住宅 (宮城県石巻市)

どこでもサロン ⑩
観音講 (福島県猪苗代町)
ショッピングセンターハズメ (福島県昭和村)

住民が支え合う生活支援 ⑫
平田はまなす (岩手県釜石市)

東北の元気 ⑬
特定非営利活動法人そのつ森 (宮城県丸森町)

被災地の今 ◆ 2014年8月 広島土砂災害から [最終回] ⑬ ⑭
社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田 浩巳さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

全国で広域避難者を支える ⑯ ⑰
一般社団法人 北海道広域避難アシスト協会
代表理事 佐藤 伸博さん




新

故郷をつくる

「新しいふるさとを本当のふるさとにしたい」

これは、宮城県岩沼市の玉浦西まちづくり住民協議会の
中川勝義会長の言葉です。

東日本大震災の影響で、
故郷をやむなく離れなければいけなくなった人たちがいます。
皆、かつての故郷への想いは強くもちつづけながらも、
新しく暮らす自分たちのまちを
ここに住んでよかったと思えるまちにしたい、
愛すべき新たな故郷にしたい
そう願ってまちづくりに取り組んでいます。



住み良い新しい故郷をつくっていくうえで、
欠かすことができないのが、自治組織の存在です。
住民同士のつながりづくり、環境の整備、
住民の困りごとの解決、公園や集会所の管理、災害への備え。
そういった生活上のさまざまな課題に対応するために、
自分たちで支え合う組織が必要なのです。

今号では、震災後に新しくつくられた3つのまちと
そのまちを温かく包み込む、自治組織の活動を取りあげます。



つばめの杜東・西区合同で夏祭りを開催

「ともに願い」「ともに寄り添い」「ともに歩む」を合言葉に

つばめの杜西区自治会（宮城県山元町）

ポイント

- 広報紙の発行や集会所の活用、多世代交流イベントをとおして「向こう三軒両隣」の実現へ
- つばめの杜東西地区合同で夏祭りを開催することが、地域一丸となる気運を高め、また町外に山元町をアピールする機会となっている

宮城県南の沿岸部に位置する山元町は、町内3か所に防災集団移転地を造成した。なかでも「つばめの杜」は規模が大きく、宅地201区画、災害公営住宅346戸の計547戸で構成される。内陸に移設された山下駅の周辺に広がり、利便性が高い。2016年8月には、買い手がついていない東西57区画を、被災していない一般市民に分譲し、子育て世代が多く移り住んだ。同年10月にまちびらきを行い、現在約1100人が暮らす。自治会は東西それぞれに発足したが、東西地区合同で夏祭りを開催するなど、一体感をたいせつにしている。

つばめの杜西区自治会長の坂根守さんは、津波被害を受けた同町花釜地区出身。「浜での生活は隣近所のつながりがあったが、それが震災で壊れ、仮設住宅で築いたつながりもまた断ち切られて、つばめの杜にやってきた。しがらみがなくて都会的な分、面識がないから近所に知らせずに家族葬をする世帯もある。若い世代からも参画を得て、

つながりをつくる地域を目指したい」と話す。

モットーは

「向こう三軒両隣」

260世帯が住むつばめの杜西区は、過半数が災害公営住宅（戸建て）で暮らしている。約100世帯がひとり暮らしで、高齢化率は43・7%と高い。

自治会では、地元の情報を共有することがつながりづくりの第一歩と考え、広報紙「つばめの杜西区だより」を年10回発行。地域への思い、行事の予定や報告、新たに引越してきた世帯の紹介などを、役員や住民が分担して執筆し、町の広報紙と一緒に全戸配付している。

活動拠点の西集会所では、住民有志による健康麻雀や小物づくりなどのサークル活動、支援団体によるダンベル・ダンス・ヨガ教室などが行われ、ご近所の関係づくりの場となっている。特に、健康麻雀には日ごろ出不精の男性も顔を出し、男女24人ほどがにぎやかに集う。麻雀の仕方をメ

つばめの杜西区自治会会長 坂根 守さん

「隣近所で関心をもつことが、
見守りや助け合いにつながる」

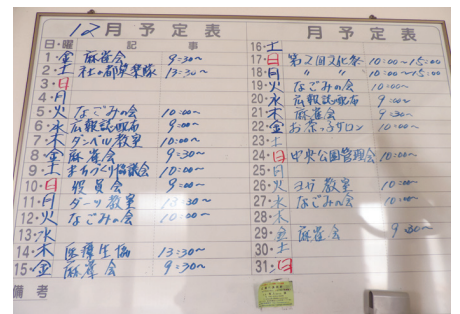


ンバーに教えたり、郷土料理のつくり方を高齢者から教わったり、住民それぞれに役割があることが、日々の活力や生きがいにつながる。坂根さんは話す。昨年12月には、写真や絵画などの住民の作品を展示する文化祭を開催し、互いの腕を認め合い励まし合った。

花釜育ちの坂根さんにとって、「向こう三軒両隣」はモットーの一つ。昨年つばめの杜で、隣の人の姿を数日間見えていないと気づいた隣家から、友人や坂根さんに連絡が入り、町地域包括支援センターにつないで訪問して、家主が一命を取りとめたことがあった。「隣近所で関心をもつことが、見守りや助け合いにつながる」(坂根さん)。

坂根さんは震災後に花釜区長を務め、在宅被災者の思いに寄り添い、故郷に集まる場をつくらうと夏祭りを企画して、途絶えていた花釜音頭を復活させた経験をもつ。その坂根さんに、

西区会長に就任してほしいと相談に来たのが、4年前つばめの杜西区に移り住み、自治活動の素地となる



集会所の掲示板には、予定がびっしり！

「ときわ会」を立ちあげたメンバーだ。西区自治会には、30〜50歳代の男女が役員に加わっており、アイデアが豊富で機動力が高い。「私は役員が動きやすいように整理するだけ」と坂根さんは笑う。

自治会広報紙には、「ともに願い、ともに寄り添い、ともに歩む」というフレーズが掲載されている。「このまちに住んでよかったね、と言い合える地域にしたい」という坂根さんの思いが込められている。

つばめの杜から 山元町をアピール！

16年8月には、つばめの杜東西地区合同で夏祭りを開催。山下駅のそばに

ある「つばめの杜中央公園」を会場に、役員やボランティアによる運営のもと、太鼓演奏や盆踊り、緑日、抽選会などが行われ、予想を大幅に超える約1300人が来場した。町内外に向けた初めての祭りとなり、地域一丸となる気運が高まって今年度も開催した。

また、震災前は山下第二小学校と合同で海岸清掃をしていたことから、自治会の発案で、つばめの杜中央公園の清掃活動を小学生とともに実施。地元の保育所とは、一緒に七夕を楽しみ、世代間交流を行っている。10月にはハロウィンイベントを開催し、仮装した子どもたちが大学生ボランティアとともに高齢者宅を回って、お菓子をもらい写真撮影をするなど盛りあ



全戸配付している「つばめの杜西区だより」(A4・1枚裏表)



夏祭りでは多世代交流も

がった。山下駅を降りてすぐに広がるつばめの杜は、役場にも近く、山元町の顔と言えるのではないか。一自治会の枠組みを超えて、山元町内外に町をアピールする取り組みにつながることで、できれば…と自治会の思いは広がる。「いまは、つばめの杜中央公園を会場に、夏は夏祭り、秋は町最大の復興イベント『ふれあい産業祭』が開かれる。ここで春と冬にも催しを開くことができれば、通年で山元町に遊びに来る機会をつくることができる」と坂根さんは話す。いままでの積み重ねを基礎にして、さらに発展させる一年に。つばめの杜の挑戦は続く。小



住民みんなでひとつの輪に。玉浦西地区で行われた夏祭りの光景

思い描いたまちの姿を確かめながら

◎玉浦西まちづくり住民協議会（宮城県岩沼市）

ポイント

- まちづくり住民協議会が、住民の関係づくりを担う。住民同士の関係性を見守り、つなぎ役となる
- 協議会は、適宜住民の声を集約して行政へ届けるとともに、環境整備や地区全体の行事の運営をとおして、地区の伝統や誇りをつないでいく

宮城県岩沼市玉浦西地区は、防災集団移転地を中心とする、震災後につくられた新しいまちだ。以前は市内の沿岸部6地区で暮らしていた住民が、そこから約3km内陸にあるこの地にまとまって移り住み、「玉浦西」の名前をつけた。この玉浦西地区で、住民同士の関係づくりを担うのが、「玉浦西まちづくり住民協議会」である。

もちろん、住民同士は見知った間柄ではある。「新しい地区に移り住んだときも、『引越してきたからよろしく願います』という改まった挨拶は、お互いに特になかった。顔をあわせたときに『あら、きたのね。よろしく』と声をかけ合うくらいだった」（協議会委員の斎藤洋子さん）

という言葉は、気心の知れた関係の良さを伝えている。しかし、そうした顔なじみの関係であっても、移住後には互いに顔をあわせる場は、限られてしまう。協議会会長の中川勝義さんによれば、「震災以前は、住民のほとんどが農家だった。高齢の人たちも作物を

つくって毎日やるべきことがあった。畑仕事の合間には縁側に近くの人たちで集まって、世間話もできた。いまはその畑がなくなってしまった。特に高齢者は毎日することがなく、行くところがなくなっている」と、環境の変化が生活に与える影響が懸念される。

そこで、住民協議会は各自治会とともに集会所の管理を担ってきた。集会所を活用して、連携する岩沼市スマイルサポートセンターなどが、お茶のみなどの住民同士が集まれる機会を設けている。住民が主体的に動いて、少しずつ趣味のサークル活動なども行われるようになってきた。

歴史や誇りを引き継ぐ

玉浦西地区には、4つの自治会が一丸となって動く、一大行事がある。毎年行われる夏祭りである。各町内会が足並みをそろえられるように、住民協議会は夏祭りの企画・運営のまとめ役を担っている。夏祭りには、旧地区出身の子どもたちも里帰りして玉浦西



玉浦西まちづくり住民協議会 会長
玉浦西 柏野釜町内会 会長
中川 勝義さん

「新しいふるさとを、本当のふるさとに」

地区を訪れることから、最も多くの人が集まっにぎわう。「これから毎年続けて、『新しいふるさと』が『本当のふるさと』になつてくれたらいいな」と、会長の中川さんは未来を語る。

地区の外周には、囲うようにして、居久根（イグネ）という風よけの木が連なつて植えられている。この木は農家の家に多くあり、旧地区の住民にとつてなじみ深く、かつてのふるさととの光景を伝えている。当時、津波被害を受けて流出した居久根は、個人資産のため、復興事業の予算で植え替えることは叶わなかった。だが、そのときに公益財団法人都市緑化機構の懸賞公募があり、そこに応募をして国土交通大臣賞を受賞することができた。その賞金を苗の購入に充て、皆で地区全体に植えた。「自分たちで植えたんだ」と中川さんたちは、この地区の伝統と面影を伝える木々を、誇りに感じている。

ほかに、震災前に沿岸にあった防潮林も新たに

植え直した。以前の貞山運河をイメージしたせせらぎをつくろうとしたが、取水源がないため断念した。かわりに緑道をまちの東西に走らせることで、貞山運河に見立てることができた。さらに、年に4〜5回は、住民協議会が音頭をとつて、草刈りなどの環境保全活動に、住民全体で取り組んでいる。このように、「緑豊かで水辺のある景観のよいまち」であること。それは、住民たちが「理想のまちの姿」として自分たちで思い描いた「まちづくりの7つの方針」のひとつであった。

まちづくりの想いを形に

7つの方針は、「玉浦西地区まちづくり検討委員会」が、住民の声をまとめたものである（本紙17号参照）。同委員会は、移転後のまちづくりを話し合う目的で2012年6月に結成。旧6地区から選出された自治会長一人、青年代表一人、女性代表一人の3人ずつ計18人の委員に、委員長・副委員長としてま

とめ役を担う学識経験者2人、外部アドバイザー3人、集団移転先の周辺地域住民である3人の委員が加わる。中川さんも、震災以前に6地区のひとつである相野釜地区の自治会長を務めていたことから、委員に就任している。

委員は、地区ごとに住民と話し合う場をもち、そこで出た意見を検討委員会にあげて、全体の方向性を議論する。議論された内容は、委員によって各地区の住民に還元され、再度話し合いが行われる。こうした積み重ねによって、徐々に合意形成が進み、個々の意見は最終的に7つの方針として集約された。

方針は資金面で断念したものを除けば、多くは実現されてきたが、一方で課題も残している。具体的には、方針のひとつ「地域の見守りにより高齢者福祉と子育てが充実したまち」づくりは、高齢化が進む同地域にあつて、今後ますます力を入れていかなければいけないものだ。検討委員会はまちづくりの方針や土地利用計画、

地区計画などを、最終報告書としてまとめて市へ提出することを契機に、13年11月に活動を終えた。その後、検討委員会が示したまちづくりが正しく実現されているか検証し、行政に対する住民の要望をまとめる組織が必要だとし、14年1月、まちづくり住民協議会が新たに結成された。ハード面を考えたきた検討委員会に対して、協議会は住民の関係づくりなどのソフト面を整えていくことが期待される。いわば、検討委員会がつくった骨組みに肉付けしていくのが、協議会の役目だ。

中川さんに、協議会としての今年の抱負を伺ったところ、「特別新しいことをやるうとは考えていない。いま、まちの形はわれわれが希望した形になりつつあり、安定してきている。やりかたをむやみに変えてしまふと定着しないし、混乱する。去年までまちづくりのためにやってきたことを繰り返して、それを根付かせ、伝統的なものにしていきたい」と、力強かった。



クリスマス会での一コマ

住民主体の倶楽部活動から、自治会の結成へ

◎志津川西第一自治会（宮城県南三陸町）

ポイント

- 住民主体の倶楽部活動をとおり住民間の関係性が育まれ、スムーズな自治会結成につながった
- 役員同士がお互いに積極的に意見を出し合い、より良い形を模索して、経験を重ねている

2017年12月16日夜。宮

城県南三陸町の町営志津川西復興住宅の集会所で、男のカラオケ倶楽部主催・自治会共催のクリスマス会が催された。約20人の参加者が、町海でとれた魚を使ったお刺身など豪華な料理に舌鼓を打ちながら、お酒を嗜み、カラオケを楽しんだ。「松島紀行」夜霧よ今夜も有難う」などの名曲を、手拍子をととり、ときに踊りもまじえて、交替で熱唱。「人生いろいろ」を歌い終われば、参加者のひとりが「人生いろいろあったな」としみじみ口にして、周りは温かな笑いで受け止めた。

参加者からは、「ここに入っただけの頃は泣いていた日もあったが、前に進まないといけない。だんだんと月日が経ってお知り合いが増えてきた。こうやって皆で集まって、いやなことを忘れて楽しめたら。皆つらい思いをしたからこそ、分かち合える」

「若返っていいですよ。仮設住宅の頃は楽しいこともあまりなかったが、いまはこうやって皆で集まれて楽しい」といった声が寄せられ、こうした行事をとおり親睦が深まり、新たな生活に向けた力

になっているようだ。

新たな生活のはじまり

志津川西復興住宅への入居は16年10月から始まった。入居間もないころから、生活援助員（LSA）の呼びかけで、毎日本体操が行われていた。そこで集まった住民たちが会をつくらうと主体的に動いて、入居一か月後には「ほっこり倶楽部」が結成された。倶楽部は、月曜日から金曜日まで、体操やお茶のみといった活動を楽しんでいる。そこから、部員たちで自由に参加できる趣味の活動をつくりたいという話も出て、ハンドメイド倶楽部や男のカラオケ倶楽部も生まれた。3つの倶楽部の活動費には、会費と参加費、赤い羽根共同募金助成金を活用している。

自治会ができるまでの間、志津川西団地（志津川西復興住宅と周辺の防災集団移転地を指す）での地域間交流イベントとしての「新年会」や「ひな祭り」などの旬の行事は、ほっこり倶楽部が主催していた。同倶楽部部長（現・自治会会計兼務）の佐藤さえ子さんや役員たちは、コミュニ

テイ構築を図る目的もあって、さまざまな活動を行ってきた。

こうした土台があつて、17年4月の自治会結成までスムーズに進めることができた。自治会役員も3つの倶楽部の会員から主に選ばれており、自治会長の阿部吉夫さんも男のカラオケ倶楽部の会員のひとりだ。会長を引き受けた当時の心境について、阿部さんは次のように話す。「自治活動の経験があつたわけじゃないが、縁があつてそういうお誘いのお話があつた。震災後にボランティアの皆さんが大勢来て、がんばってくださいっていた姿も見てきた。俺も何か一つ役に立てないものかと思つて、引き受けました」。

住宅の入居者は、震災以前、沿岸部の中瀬町に住んでいた住民が過半数を占めていて、古くからの顔なじみも多い。役員同士仲睦まじく、活発に意見が出されるといふ。阿部さんと自治会副会長の遠藤直行さんは他地区の出身だが、まとめ役となつて会を支えている。

17年7月には宮城県

「地域コミュニティ再生支援事業補助金」を申請。補助金も活用しながら、冒頭のクリスマス会をはじめ、9月の敬老会、10月の芋煮会、11月の防災訓練など季節ごとに行事を開き、住民同士の交流を図ってきた。こうした行事は、自治会の庶務遠藤真利子さんが「自治会便り」を作成して、班長（住宅の各階につき2人が就任）から全戸に配布してお知らせしている。

最後に、会長、副会長に新年の抱負を伺った。「どうやったら皆が仲良くできるかまだ手探りの状態。行事の開催も、日中働いている人が出られるように土日や夜などの開催を試している。少しずつ参加者も増えてきたが、一層増やしていきたいように、今年も更なる努力をしていきたい」（遠藤さん）。「今年からは防災集団移転で入って来た人たちも同じ行政区に加わります。皆で元気にコミュニケーションをとってがんばっていきしかないと思つている」（阿部さん）。住民皆でより良い形を模索しながら、暮らしやすい地域を築いていく。

田

専門家に聞く地域づくりのヒント

グローバルな地域運営へ



東北工業大学工学部建築学科 准教授
NPO法人つながりデザインセンター・あすと長町 副代表理事

新井 信幸（あらい・のぶゆき）さん

千葉大学博士課程修了。財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団・研究員を経て、2009年4月から現職。専門は、建築計画、住まいまちづくり。主な研究テーマは、復興コミュニティデザイン、住宅困窮者のための居住支援、住宅ストックの活用方策など。
賞歴：都市住宅学会業績賞（2017）、日本都市計画家協会賞（2015）

地域情報紙を発行する「つばめの杜西区（山元町）」、イグネ（屋敷林）の植林から草刈り等の環境保全を進める「玉浦西地区（岩沼市）」、多様なサークル活動を展開する「志津川西団地（南三陸町）」、それぞれ精力的なリーダーがいて、住民同士の新たなつながりのためのさまざまな工夫がなされており、コミュニティの力（ソーシャル・キャピタル）の大きさを感じさせる。その一方で、「1年経っても自治会が立ちあがらない」「立ちあがっても機能しない」そんな声が被災各地から聞こえてくる。その要因には、高齢化による担い手不足、そして、そもそも自治会への関心が薄い人が少なくないことがあげられる。そうした傾向は、被災地特有というわけではなく、全国どんな地域にも当てはまる課題でもある。では、今後の地域運営はどうすればよいのだろうか。これには仮設住宅時代にヒントがあるように思われる。

仮設住宅では、外部からボランティアやNPOなどがやってきて、音楽イベント、お茶会、マッサージなど、楽しみながら交流を促す取り組みが実践されていた。私がかかわ

た「あすと長町仮設住宅（仙台市）」も同様に、集会所で毎日のようにイベントがあり、みんなの居場所となっていた。そして、NPOなどの十数団体が連携して、近隣に建った災害公営住宅を拠点として活動を継続しようと、一昨年「つながりデザインセンター・あすと長町」を発足させた。被災各地を見渡しても外部からの支援や取り組みがいまも継続しているところが少なくない。外から来て活動を展開する彼らは、「自身の地元よりも、他地域で活動するほうがしがらみがなくてやりやすい」と言う。

このように越境して、まちづくりを実践する人や団体はかなり多く存在する。それは復興過程に限らず、平時のまちづくりの場面でもそうである。こうした外部からの人たちと協力しながら地域を運営する現象を、ここでは「地域運営のグローバル化」とでも呼ぼう。家族形態や暮らしの価値観が多様化し、地域社会に求められるニーズも多様化する現代にあつては、これまでのような「自治」という内向きの志向では限界がある。復興を機に、グローバルな地域運営への転換が求められている。



まじわる！ 集団移転＆ 災害公営住宅

第29回

顔合わせを重ね、 団地内外のつながりを育む

湊町復興住宅
(宮城県石巻市)



おしゃべりしたり、教え合ったりしながら手芸を楽しむ

2016年10月に入居が開始された、石巻市の湊町復興住宅では、17年9月から、毎月第3木曜日の午前中、入居者の交流や外出のきっかけづくりを目的に「花水喜会」という集まりが開かれている。毎回15人程度が、集会所で手芸など小物づくりやお茶飲みをし、和気あいあいと過ごす。同12月には、クリスマス会として、集会所のツリーの飾りつけや自宅用の装飾品作成をした。昼食に、メンバーが自宅で手づくりして

きたカレーライスやケーキを皆で食べ、午後も手芸とおしゃべりを楽しんだ。

メンバーのほとんどが高齢の女性で、「ひとり暮らしなので、ふだんは誰かと話すということがない」「こういう機会がないと、部屋に閉じこもっちゃう」「以前はみなし仮設住宅に住んでいて、近所との交流もなかったからうれしい」などと活動をよろこんでいる。

メンバーの最年長、90歳の女性も、ほかのメンバーと話しながら、元気に手仕事に勤しむ。

同会は、日本赤十字社から年間10万円の助成を受けて、そこから主な活動費用を捻出。会の代表で、団地会副会長の稲井範子さんが、仮設住宅に住んでいたときにボランティアからもらった古布なども手芸に利用している。

花水喜会以外にも、稲井さんのコーディネートのもと、団地外からのボランティアと一緒に、入居者や周辺の地域住民が音楽や食事などを楽しむ催しを開いている。ボランティアは、主に稲井さんが仮設住



皆と一緒に食べる昼食は一層のごちそう

宅でつながりをもった団体など。災害公営住宅でも、入居者や地域住民の交流のきっかけをつくっている。

地元の湊町内会とは、合同で防災訓練も行った。同住宅の1つの棟の屋上に、津波に備えた避難所が設けられていて、その活用方法などを確かめるため、約70人が参加し、実際にサイレンを鳴らして屋上まで上った。そのあとは、集会所前の広場でバーベキューをして親睦を深めた。ふだんはお茶会のようなものにはあまり参加しない男性たちも、お酒などを持ち寄り、楽しく交流したという。

同住宅が建つ湊町1丁目には、東日本大震災前は100世帯以上が暮らしていたが、津波の被害を受け、いまは団地以外には20世帯ほどしか生活していない。

新しく建設された災害公営住宅の内部だけでなく、周辺の地域住民との交流もたいせつだ。花水喜会という名称も、もともとは震災前の湊町町内会婦人部を指していたもの。かつて、婦人部部長を務めていたこともある稲井さんが、「団地周辺の住民にも親しみをもって参加してもらいたい」と考えて名づけた。

団地には、高齢で独居の世帯が多く、孤立してしまいう不安も少なくない。花水喜会の手伝いもしている、団地会会長の佐藤さんは、「今後もたくさんの方の出会いの場づくりを支えていければ」と抱負を語る。仮設住宅で生活していたときにできた人脈なども生かしながら、災害公営住宅入居者とその周辺の地域住民とで、新たなつながりを持ち、支え合える地域づくりに励む。

DATA

湊町復興住宅

宮城県石巻市湊町1丁目
5番3号ほか
鉄筋コンクリート造5～6
階建て3棟。全82戸に
69世帯が入居。



どごごでもサロン

第6回

自然なつながりと支え合いを生み出す



伝統行事でつながりづくり 観音講

福島県猪苗代町烏帽子地区

福島県猪苗代町の烏帽子地区。

集会所の広間に60〜80歳代の女性たちが集まる。観音菩薩の掛け軸を掲げ、小さな祭壇を設けて灯明をともし、祭壇の前に並んで座る。最前列の一人が鉦を叩き、そのリズムに合わせて、全員で会津三十三観音のご詠歌（ご利益などを讃える和歌）を唱和する。これを「歌詠み」という。

20〜30分で歌詠みを終え、お神酒をいただく。

そのあと1時間ほどは、用意したお菓子と飲み物でゆっくりお茶飲みを楽しむ。

この集会は、「観音講」と呼ばれる。猪苗代町をはじめ福島県会津地方でいまでも受け継がれる伝統行事だ。各地区ごとに、女性だけで執り行われることが多い。観音菩薩を祭るお堂のほか地区集会所、宴会場などに集まり、西国三十三観音や会津三十三観音のご詠歌を唱和、飲食をともにする。

観音菩薩は、女性や子どもを守るとされる。家族の健康と安全を願う女性たちの祈りが、観音講では歌詠みで表現される。

講の開催回数は、年1回から月1回まで地区によってまちまち。烏帽子地区では2、4、8、11月の年4回開かれる。

原則として地区の全戸（現在24戸）から一人ずつ、家内を取り仕切る主婦の座にある女性が参加する。

「観音講は、年4回のお楽しみなの。私は50歳のころからもう30年以上続けて来ているんだよ」と85歳女性。

ふだんなかなか会えない人とも講で顔を合わせ、親しく話ができる。

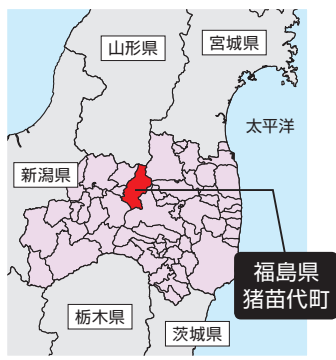
「集まっておしゃべりするの何より楽しい。誰が元気だとか、誰が具合が悪いだとか、地区の人たちの様子もわかる」

日ごろ近所の友人とお茶飲みをしたり、老人会の活動があれば参加してもいいが、講で集まる楽しさ、うれしさは、格別だという。

数年に1度は、講の仲間同士で旅行をする。茶菓子代として徴収する1500円の会費の部を積み立て、旅行の資金に充てる。

「いつまでも続けてほしい。私みたいな年寄りには、たいせつな行事なんだよ」

観音講は、女性たちのための



交流サロン。伝統行事のなかに、つながりづくりと支え合いの知恵がある。木



商店は支え合いの拠点 ショッピングセンターハゾメ

福島県昭和村

福島県昭和村は、会津地方の

山あいであり、約600世帯
1300人ほどが暮らす。高齢

になっても仕事や農作業を続
ける人が多く、近所の住民同士

で「お茶飲み」をする習慣も色
濃く残っている。こうした生活

文化は、高齢者の心身の健康増
進に役立つとされる。実際、村

の高齢化率は56%に達するが、
元気な高齢者の姿が目立つ。

村の商店のひとつ「ショッピング
センターハゾメ」は、食品、日

用品、衣類、雑貨、化粧品な
どを扱うミニスーパー。買いたいもの

客が、のんびりお茶飲みを楽し
む社交の場でもある。

社長の羽染アキノさん（85
歳）は、客が来ると「お茶でも

飲んでいって」と誘う。売り
場脇の事務所が、お茶飲みコー

ナー。羽染さんは常に飲みも
のとお茶請けを用意している。

客もしばしば手づくりの漬け
ものや煮もの、菓子などを持

参し、皆におすす分けする。
「ここに来れば必ず誰か

て、お茶飲みができる。さま
ざまな話が聞けて楽しいし、
勉強にもなるよ」

こう話すのは、近所の83歳

の女性。ひとり暮らしだ。

「この店がなくなったら、い
んなら人に会っておしゃべり

することもできなくなる。買
いものにも困ってしまう」

お茶飲み常連の大半は60〜
90歳代の女性だが、男性高齢

者もいる。80歳代のあるひと
り暮らしの男性は、料理が大

の苦手。彼が店に来ると、羽
染さんは余分につくっておい

た食事をごちそうしたり、お
かずをバックに詰めて渡した

りする。お茶飲みをしながら、
簡単なおかずの調理法を伝授

することも。彼はそのお返し
に、羽染さんの畑の手入れを

手伝う。

電話注文による商品配達に
も応じるが、移動手段のない

高齢者のために、さらに踏み
込んだ対応も取っている。あ

る集落の高齢女性3人組が、
電話で店に「買いたいものをし

たい」と連絡。すると店員が車
で迎えに行く。3人が買いた

いのをし、お茶飲みを楽しんだ
ら、自宅まで送る。

村のショッピングセンター
は、支え合いセンターでもあ



すい地域づくりに大いに貢献
している。木



配膳をしながら、参加者との会話を楽しむ

地域の困りごとを

気軽に持ちよる居場所に

地域の困りごとを気軽に頼める居場所を目指して、岩手県釜石市平田地区の住民有志グループ「平田はまなす」は、支え合いサロンを開催している。昼食を囲み、和やかな楽しい企画で交流できるサロンの会場は、同地区の災害公営住宅の敷地にある集会所だ。

2015年度、市・社協・支援団体が共同実施した復興庁の先導モデル事業の一環として、生活支援の担い手づくりと地域の支え合いづくりを目指す取り組みに、平田地区の住民たちが参加をしたことをきっかけに、2015年2月に、「平田はまなす」が誕生した。「震災後の平田地区で、住民同士が気軽に困りごとを

相談できるような地域の関係をつくりたいと考え、自分たちのできること（Ⅱ世話焼き）を行う6人の仲間が集まりました」と、代表の庄司嘉市さん（79）は、当時を振り返る。

運営メンバー6人が中心となって企画を考え、月1回のサロン開催を決めた。一回300円の参加費で運営経費を賄い、趣味や特技（歌や踊り）を持つ地域住民の力を借りながら、サロンを実施している。気軽に足を運んでもらうため、高齢者世帯やひとり暮らし世帯、災害公営住宅の入居者へ、毎月丁寧に案内を行っている。地道な声かけが、見守り活動や地域住民のニーズの把握、住民の外

出の機会にもつながっている。必要に応じて自治会や平田地区生活応援センター（行政）、釜石市社会福祉協議会にも声をかけ、活動上の困難や住民の困りごとについて、連携しながら対応している。

サロンの調理を担当する松坂康子さん（80歳）は、「地域の役に立てるような活動を自分自身も楽しみながらやっています」と、運営に携わる。以前、食堂を手がけていたこともあり、食事の楽しさを伝え、栄養面もサポート。限られた経費をやりくりしながら、季節感を取り入れたメニューを提供している。

● DATA

平田はまなす
平田地区全域を対象とした支え合いサロンの企画運営を浸水津波の被害を受けた民家を免れた民家を対象とした。人口3011人、高齢化率30.8%。連絡先 釜石市社会福祉協議会 026-0025 岩手県釜石市大渡町3丁目15-26

サロン開始から2年となる。「何よりも、地域での信頼関係ができたことが、この2年間での大きな成果」と、庄司さん。参加者から、一緒に取り組む仲間も出てきた。今年4月には、平田地区に新たな集会所が完成する。平田はまなすは、新たな場所でのサロンの開催と、暮らしの困りごとを補い合える活動を模索し、これからも「地域の世話焼きさん」として活動を続けていく。



おいしいお昼ご飯を提供しようと準備を進めるメンバー



12月のクリスマス企画の手づくり昼食



17年12月のサロンはまなすの運営メンバー世話焼きさんたちの集まり

DATA

特定非営利活動法人
そのつ森

〒981-2201

宮城県丸森町筆甫字和田73

TEL 0224-87-6362

FAX 050-3737-3341

53回目

市民リレー

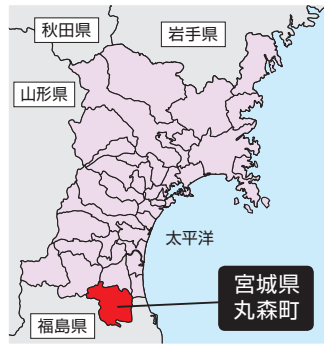
東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

廃校の再活用で 地域生活を支える

◎特定非営利活動法人そのつ森（宮城県丸森町）



体育館やグラウンドも利用可能

子どもも高齢者も混ざってさをり織り

利用者皆で仲良くお茶飲み

福島県に隣接する、宮城県丸森町。2007年に閉校した旧町立筆甫中学校の校舎を、「特定非営利活動法人そのつ森」が、通所介護と宿泊の施設として管理・運営している。

東日本大震災直後、校舎は福島県南相馬市民（最大約2000人）の避難所になった。その務めを終え、「地域住民の思い入れのある校舎をこれからも地域のために使いたい」と、校舎の再活用に向けた話し合いが設けられた。13年に地元住民中心でそのつ森を設立し、町から無償で借り受けた校舎は、一部改修後、15年に地域の「福祉」と「交流」の拠点に生まれ変わった。

平日の日に開所し、週3、4日がデイサービスの実施日で、15人ほどが利用している。毎月2回は、町からの委託で、転倒や認知症の予防といった一般介護予防事業を実施し、20人ほどが参加登録している。宿泊事業では簡易宿泊の許可をとり、遠方からもクラブの合宿や旅行などで訪れる宿泊客を受け入れている。

そのつ森では、デイサービスを「デイシェア」と呼ぶ。利用者や介護者がサービスを授受するだけの関係ではなく、時間や知識、思いを共有（シェア）し、足りないものを補い、支え合って暮らしていくための場所を目指しているからだ。利用者は、さをり織りや小物づくり、そのほかのレクリエーションなどを通じて、生きがいをもち、親睦を深める。ほとんどが筆甫地区民なので、皆顔なじみの関係だ。地域に暮らす仲間として、利用者もスタッフも仲が良く、互いの近況や体調を気にかける。

有給スタッフやボランティアによる約10人体制。介護福祉士や鍼灸按摩マッサージ師を中心に、そのほかのスタッフも介護の資格を取るなど、実地に学んで技術を身に付けてきた。要介護度が高い利用者も受け入れる。話をするのが好きな日中独居の高齢女性や、料理上手な男性などもボランティアで参加してくれて、地域住民がスタッフとして輝く場でもある。

介護スタッフも務める代表理事の太田茂樹さんは「地域の人のための施設として、筆甫地区に合ったアットホームな空間でありたい」と語る。今後もより多くの人に足を運んでもらい、地区内外の子どもから高齢者まで皆が交流し、支え合うきっかけになる場所にしたいと考えている。

清

最終回

継続は力なり。普段のつながりは必要

社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田浩巳

2014年8月20日未明

に起きた広島土砂災害。避難所に一時避難されていた人の多くは、日中は自宅で泥出しを行い、夜は避難所で寝る状況が続いていました。9月前後になると自宅での生活に戻る人が徐々に増えてきました。

その頃の「生活支援チーム」の構成員は、看護師だけでなく、社会福祉士や弁護士、ケアマネジャーなどの専門職に加え、夏休みや土・日曜日を利用して大学生や高校生の協力もありました。特に、高齢者世帯宅への訪問では、大学生や高校生との会話で和やかな雰囲気になり、「こうやって来てもらえるだけでうれしいよ」とにっこりされることが多かったのです。

誰もが参加できる

集い場づくり

被災地域が少しずつ日常生活に戻るにつれて、「そろそろ、この辺りの人たちとも話したい」「近所のAさんはどうしてるんかね」という声が訪問時に聞かれるようになりました。新たに集える場がほしいという声も、共通していました。そこで、地区社会福祉協議会や町内会などが運営する「ふれあいいいきサロン」とは別に、新たな集いの場「すまいるカフェ」を地元の方と協働で開催しました。

「すまいるカフェ」は、被災の有無に関わらず、子どもから高齢者まで誰もが自由に参加できます。たくさんの方のボランティアの協力のもと、会話を楽しまただけではなく、もみ

ほぐしや足湯などを実施。ほろこりしながら、ワイワイガヤガヤ。リラクセスするなかで、「あのときは本当に怖かった」「今も雨が降ると怖い」「眠れない」といった言葉も聞かれました。

開催にあたっては、地元の概ね町内会エリアにチラシを全戸配布し、気になる世帯への声かけには民生委員・児童委員の協力が欠かせませんでした。カフェで使用するコピー紙は、全国から寄せられた寄付を活用させていただき、たいへん助かりました。

これをきっかけに、「すまいるカフェ」を住民主体で現在も継続実施している地域があります。

個別支援から地域支援へ

同年10月には「災害ボラン

ティアセンター」から「復興連携センター」に名称が変わり、生活支援チームがセンターの主な活動となりました。個別支援から地域支援への切り替えを意識した時期でもあります。震災直後の避難所では「助け合っていこう」という言葉が自然発生的に生まれましたが、日常生活に戻り始めると、災害前のような、気にかけてあげない雰囲気を感じました。

災害を経験してわかったことは、普段のつながりは必要不可欠だということです。さりげなく自然につながっていることで、気づくと、お互いを気にかけて合っている環境はたいていです。広島県内だけでなく、全国からのさまざまな支援、支え合いや助け合いに感謝しています。

石田 浩巳 (いしだ・ひろみ)

1972年山口県生まれ。小学生2年生のときに父親の転勤で広島に引っ越す。1994年6月より財団法人広島勤労者職業福祉センター(広島サンプラザ)で勤務、スポーツ関係、文化関係等多方面の方々と関係を築く。2004年に広島市社会福祉協議会に転籍。西区や安佐北区社会福祉協議会等を経て、2017年4月より現職。



宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

今年の抱負

賀正。早いもので当事務所も7度目の年越し。年越しを契機にリセットして、気分も新たに「今年の抱負」を書こうと思いましたが、先に進みません。毎年繰り返す「抱負」探し、ポキャブラリーが豊富にないので、抱負は先送り？何だか昨年も同じようなことを書いた記憶が…。

この「サポートセンター行脚」、毎回書くことに悩むのです（誰ですか？悩むほどの内容じゃねえ！とは？）。そのため、この欄を書くにあたって参考にしている人がいます。週刊文春で連載されている伊集院静さんの『悩むが花』です。もちろん、文章表現やペンの力には足元にも及びませんので「ホンネ」「親爺力」をヒントにもらっています。

愛読してから久しいのですが、悪影響が出ています。かつては、抑制的で紳士的に物腰を柔らかく、あくまでも建前論に徹し、目立たぬように「よい人」になると思っていたのですが、気がつけば、怒りっぽい頑固爺さんになっていました。伊集院さんのようなお洒落さと真逆。いまの私は、体型的にはマイケル・ムーアで、精神的には偏屈・頑固・独りよがり。

伊集院さんの人生相談は、辛辣ですが心地よい。一例を紹介すると「サンタは本当にいる」と子に教えてきた父親の悩み。信じていた小5の息子が友だちからかわれ、「嘘をついているならお父さんのことを嫌いになる」と言われたという悩みに対して、以下、伊集院さんの弁です。

『サンタクローズはいたんですよ。だから息子さんが目を覚ました時、枕元にプレゼントがあったんですよ。あなたたちが買ってこようが、サンタクローズがいたから買わせただよ。サンタクローズが来た家なんですよ』

こんな、気の利いたこと語る大人がいなくなりましたね。

気の利いたことは言えないから、本音で思いをぶつけ、他人事で「福祉」を語ろうとする連中とはバトルが続きそう。これが、今年の抱負？疲れそう！！

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



うたかた 泡沫・一瞬の輝きを記憶にも残さず

68年間生きてきた。先月10年ぶりに小学校の同窓会があり故郷、鳥取に帰省した。

集まったのは11人の友がき。10年前の記念写真と目の前の同級生たちの顔、姿を見比べた。肉体に与える歳月の過酷さを思い知らされる。一学年一クラス28人の海沿いにある小さな村の小学校だった。そして今、8人はすでにこの世に姿を見せない。

街に出ると否応もなく高齢者の姿が目につく。自分と同年代とおぼしき人の姿を見て思わず他者から観た我が身の姿を想像する。

この間正月を迎えたと思ったのにいつの間にか年の瀬、クリスマスの時期になっている。時間の経過が年とともに早まっていく。「諸行無常」というお釈迦さまが明らかにした宇宙の真理を嫌というほど実感するこの頃。“露と落ち露と消えにし我が身かな 難波のことも夢のまた夢”と辞世の句を残したのは天下人となった豊臣秀吉。栄華を誇った人も、栄光を勝ち得た人もそうでなかった人もいつか必ずこの世を去っていく。ささやかなことに喜び、あるいはこだわって怒り、悲しみ、争い、時間を費やしていく。流れ流れて年を取っていく。“老い”をだんだんと身近なものに感じ、そして逃げられない現実以降参し、いつか自然に受け入れていくのだろうか？

大震災の出来事も、被災者支援に奔走した支援員さんたちのあのがんばりも、輝きもすぎ去ったところから見渡すと、一瞬の輝きだったのかと思う。

人生の出来事も人との出会いも一瞬の泡沫のようなものかもしれない。その一瞬一瞬に、人は一喜一憂しながら生きている。長い時間が経てば、すべてのものが消えていく。それで良いしそれが現実。だからこそ、いまこの時をたいせつにして味わって生きたい。たとえ泡沫のように消えたとしても、いつか誰からの記憶にも残らなくても。自分なりの輝きを灯して・・・。

さ～、新しい年はどんな年になるのか、どんな素敵な出会いがあるのか楽しみにしながら・・・。

平成29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<ステップアップ研修>

【仙台会場②】 1月22日(月) 宮城県本町第3分庁舎

講師：永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

<講座6 住民主体で進める支え合いの地域づくり③大分県中津市
中山間地域における支え合いの地域づくりを学ぶ>

【仙台会場】 2月14日(水) エスポールみやぎ

講師：吉田 日出子(地域ボランティア沖代すずめ代表、
住民型有償サービス沖代どんぐりサービス代表)

梅木 治三郎(耶馬深見守りネットワーク協議会会長、
住民型有償サービス耶馬溪たんぼぼサービス代表)

岩波 豊治(中津市社会福祉協議会 地域福祉課 地域福祉係)

高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

宮城県サポートセンター支援事務所

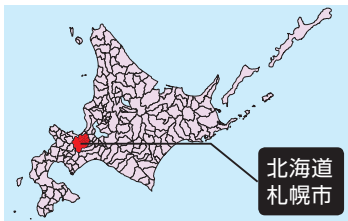
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

歩み始めた人の想いをつないでいく

一般社団法人 北海道広域避難アシスト協会 代表理事 佐藤 伸博



北海道外からの避難者の相談会を実施



宮城県では、東日本大震災後に県外へ避難した人たちを支えるため、全国に「みやぎ避難者帰郷支援センター」を設け、帰郷や避難先での生活再建に向けた相談の窓口を開いている。同センターの運営を受託した3団体から、広域避難者の支援について語ってもらう。

当団体は、北海道内で避難者支援活動をしていた経営者有志と、避難者自助団体による避難者支援活動を継続するために、独立した組織として2013年12月に一般社団法人として設立した。14年3月より北海道の委託事業として道内避難者の支援を実施するとともに、宮城県避難者帰郷支援センター業務も受託している。また、一昨年より、東日本大震災に関する体験談を伝えるため、行政、学校、民間団体などで講演を行っている。

北海道が公表している「被災避難者の受入状況」によれば、北海道内の東日本大震災による避難者数は、3,220人のピーク時から約6割と減少しているが、未だに1,838人(17年12月12日時点)の方が避難生活を継続中で、道内への定住を決めた世帯や、最初から登録していない世帯を含めると、被災・避難者の数は数千人にのぼると言われている(私自身も宮城県からの自主避難者であったが、定住を決めて避難者登録は解除)。

避難者の避難理由、家族構成、地震・津波による損害状況、健康状態、経済状況が千差万別であるため、何を支援するべきかは世帯ごとに違う。この状況のなかで、何を支援できるのか。北海道庁をはじめ、道内の支援団体の対応は本当にあたたかい。当団

体は行政からの受託事業として避難者支援に携わってきた。受託事業のなかで継続している情報紙『からから』があるが、その時期に避難者が必要としている情報を掲載し続けている。移住情報の年もあれば、ADR(裁判外紛争解決手続)に関する情報や弁護士のコラム、こころのケアに関することなど多岐にわたってきた。今年度は、避難者が北海道で開いた飲食店の紹介記事や、さまざまな状況にある避難者・移住者へのインタビュー、被災地のいまなどを掲載している。紙面を通じて、歩み始めた人の想いが、次に続く人への励ましになることを願っている。

避難者にとって必要なのはコミュニティであり、社会的孤立をなくすことは震災避難者に限らず、今後の社会において重要であると感じている。東日本大震災からもうすぐ7年が経過するが、東日本大震災に限らず、日常からつながりを感じてもらえるような活動を今後も模索していきたい。

DATA

〒004-0052 北海道札幌市厚別区厚別中央二条4丁目1-2ラ・シュエット新札幌101
TEL 011-375-0521 FAX 011-351-5557 フリーダイヤル 0120-311-403
MAIL office@kouiki-assist.com HP <http://www.kouiki-assist.com>
Facebook <https://facebook.com/kouiki-assist/>

☆次号予告 特集「食」

平成29年度 宮城県地域福祉コーディネート研修事業

<スーパーバイザー研修>

【仙台会場②】 2月1日(木) 宮城県自治会館

講師: 大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副学院長)

佐藤 幸子(特定非営利活動法人

自閉症ピアリンクセンターここねっと 理事長)

<地域福祉コーディネート基礎・実践研修>

【仙台会場②】 2月5日(月)~6日(火) エスポールみやぎ

講師: 藤井 博志(関西学院大学 人間福祉学部 教授)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

63号を拝見しました。ホームひなたぼっこは、お互いに負担にならず、その時々でふれあえるような距離感が絶妙だと思いました。ちびぞうくらぶは、主婦の方々で始めた等身大の活動が魅力的です。これからの活動の展開も楽しみです。びすた〜りは、スタッフにもお客さんにも心地良い空間で、新鮮野菜を使ったこだわり食材を提供しているとのこと、ぜひ一度足を運んでみたいなと思いました。(仙台市泉区 Y・T)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

今年の干支は戌年。「戌」には、「作物を刈り取り、まとめる」という意味があるそうです。各地で移転が進み、少しずつ日常を取り戻しつつある人が増えています。宮城県は今年度からの三年間を復興計画の発展期に位置づけます。被災地は次の復興段階に差しかかっています。一方で仮設住宅での生活を余儀なくされるなど、変わらぬ支援を必要とする人もいて、継続的に活動する支援者もいます。どうか皆様にとって、実り多い良き一年となりますように。(田中)

